

資料

渡邊洋次郎氏講演録「生き直す～依存症からのリカバリー～」

(2022年10月27日 於 高知大学朝倉キャンパス)

解題 稲田 朗 子

解題

少年法に関心を持つ学生に、関心をもつに至ったきっかけを問うと、「凶悪少年犯罪」と回答されることがしばしばある。「被害者」への共感に比し「加害者」へは敵意をむき出しにする（ただし、その自覚は乏しい？）というこの傾向は、近年とりわけ顕著になっている印象がある。かつてはまだ、「加害者」の生育環境などへの関心も若干は聞かれたが、最近は何もない。このような「犯罪」を犯す少年には、厳しい刑罰を科すべきである。そうでないと「被害者」は浮かばれない。ネット上に氾濫する、過去の事件の情報が、彼らの思いを強固にしているようである。

犯罪や非行の原因は、「個人の資質」のみに帰せられるものか。それとも、「社会の病理」の表出なのか。そもそも、私たちは、「リアルな」非行少年を知っているのか。本講演会講師の渡邊洋次郎氏¹は、少年院入所歴、精神科病院入院歴（48回）、刑務所服役の経験をもつ「アルコールと薬物の依存症」のサバイバーである。今回、大変幸いなことに、経済学会講演会として、渡邊氏に高知においていただき、お話をさせていただく機会を得ることができた。渡邊氏のお話は、犯罪や非行をどうとらえるべきかについて、大変実践的な示唆に富むものである。私たちの目標が、犯罪や非行の「被害者」も「加害者」も共にそ

高知論叢（社会科学）第124号 2023年3月

¹ 代表的な著書として、渡邊洋次郎『下手くそやけどなんとか生きてるねん。—薬物・アルコール依存症からのリカバリー—』（現代書館、2019年）。

の尊厳を回復することであるとするならば、「悪い奴を（見せしめ的に）懲らしめればよい」という短絡的な愚策をとることはできないだろう。さらに、この問題が、刑事法関連領域のみで解決できるものではないことも、改めて認識することができよう。

本講演会当日は、人文社会科学部社会科学コースの学生を中心に、人文社会科学部教員、KULASの掲示を目に留めて朝倉キャンパスに聴講に来られた他学部の学生等の参加を得た。質疑応答では、積極的に手が挙がり、講演会終了後も、渡邊氏に直接質問する学生の姿がみられた。また、高知新聞社・松田さやか記者の取材で、本講演会要旨が記事化²されているので、そちらも是非ご覧いただければ幸いである。もっとも、残念ながらコロナ禍での開催であったことから、参加者を学内に限定したため、学外者の方には直接の聴講の機会を提供することができなかった。今回、講演録として『高知論叢』にて活字化することを御快諾いただいた渡邊氏に深く感謝するとともに、この講演録が、多様な場で活かされたり、様々な議論のきっかけになれば幸いである。

なお、本講演会の司会は稲田が務めた。講演録の見出しは、記録の便宜のために後日、稲田が付したものであるので、ご容赦願いたい。また、本講演録の反訳は、人文社会科学部社会科学コース稲田ゼミ生諸君³によって行われた。講演会の事務運営についても、同ゼミ生に多大な協力を得た。

最後に、本講演会開催にあたっては、「2022年度 経済学会正会員教育研究支援経費」の助成を得た。厚く御礼を申し上げる。

(稲田朗子 記)

生き直す～依存症からのリカバリー～

- 1 プロフィール
- 2 自傷行為の始まり

² 高知新聞2022年11月11日付朝刊14面（松田さやか記者署名記事）。

³ 利根川響，羽藤敏孝，下畦晴人，横畑嘉人，今井純，楠瀬佳奈，和田満璃奈，内村健人，崎山日菜子，綾田薫。

- 3 父親との別れ
- 4 アルコール依存症
- 5 自助グループとの出会い
- 6 独房での体験
- 7 出所後の支援
- 8 「地球はちっちゃい」
- 9 質疑応答

1 プロフィール

皆さんおはようございます。大阪で依存症の人が地域で生活するのを支援する事業所で働いています、渡邊洋次郎と申します。よろしく申し上げます。

高知の方には実は何度か来てまして、刑務所出てから13年と半年くらい経ってるんですけど、刑務所出て間もない頃に何度かこっちで自助グループの仲間とかの集まりがあって、何回か来ていて、久しぶりに今日高知来てよかったなと思ってます。よろしく申し上げます。

依存症のことと違ってあんまり分からないですかね？あと自分大学とかに全然行ったことがないので、なんか何年生とか何回生みたいと言われてもイメージがあまりつかないんですけど。高知の人酒すごい飲むんですね、多分。だからまあ身近なのかなとも思うんですけど。まあ聞いていただけたらと思います。

今はリハビリハウスいちごという、依存症の人が地域で生活して回復していくための支援をしている事業所で働いているんですが、いま事業所自体に職員が50人か60人ぐらいいるんですけど、そのうちの15名とか20名くらいは依存症の本人で、お酒とか薬を止める中で仕事としていちごで働いておまして。依存症の分野は依存症の本人が酒とか薬を止めて働いているのも結構多いので、あまり珍しくはないのかなとは思いますが。

すみません、ちょっと座らせていただきます。講師の先生みたいな感じで自分しゃべれないので、喋るのが変な感じになると思うんですけど気楽に聞いていただけたらと思います。いま自分46歳で依存症と言われたのが26年前の、20歳の時に初めて精神病院に行って依存症というふうに言われました。で、もと

もと中学ぐらいからずっと薬物をやっていて、最近の若い方とかあまりご存知じゃないと思うんですけど、自分らが中学の時とかはシンナーとかがすごい流行っていて、ビニール袋に液体みたいなのを入れてスーハースーハー吸ってるような、そういうものなんですけど、そういうのをずっと使っていました。当時は病気っていうふうに言われるよりも、普通に警察に逮捕されて、鑑別所に入って、少年院に入って、というようなどっちかという司法が扱うような問題として捉えていたところがあるのかなと思います。

五人家族で大阪ですべて生まれ育って、ずっと生活してきたんですけど、母親も父親も普通に仕事してはる人で、あまり問題がないというか、仕事もせんとただだらしているってよりも普通に仕事している両親なんですけど。父親がすごいお酒を結構飲む人で、家に普通にお酒があって、晩酌して、日曜日とかは朝からお酒飲んでるみたいな感じやったんで、すごい身近なものとしてアルコールはありました。家の中にもあるし、親が飲んでるし、楽しそうに飲んであったんで、お酒っていうのはそういうもんかなって思うようにはなりました。

もともと、まあ今も頭が悪いままなんですけど、小学校の頃もずっと頭めっちゃめっちゃ悪くて、ほとんど勉強ができず、テストとかもオールゼロみたいな感じやったんですけど、学力とかだけじゃなく、保育所の頃も小学校の頃も、周りで起こっていることがあんまり理解できないところがあって、5歳くらいまで敬語でものが喋れなかったり、保育所の頃に友達同士でちょっとあんまり良くないことをしたときがあったみたいで、その時に保育士さんとかも怒って、「悪いことしたんやから謝りなさい」みたいになっても、謝らないような子どもやったというふうに聞きました。小学校入ってからも学校なんで時間割表を配られて、その時間割表で、友達とか教科書揃えて学校に行ってそれで勉強するみたいなことしてたんですけど、ただ自分は時間割表を渡されてもその時間割表がどういう意図があるのか全然わからなくて。あとは外履きで登校して下駄箱で上履きに履き替えて教室に入るんですけど、それができない。

今この年齢になって当時のことを振り返ると、時間割表の紙が持っている意味・意図が分からなかったり、普通にみんなが行っていること、教室に入ったなりなどがうまく理解できなかったりした。今だと、何が分からなかったかが分

かるので、それを教えてもらうことができるけれども、当時は、自分は「何が分からないのかが分からない状態」だったので、周りに対しても、自分が何に対して困っているのかを言えず、周りにいた大人や先生は、やらない行動や態度だけ見て、すごく不真面目な子だとなっていました。家族5人で、行事ごとみたいに香川県の宅間という田舎に、年に2回、お盆とお正月が来たら帰るのですけど、その時に両親が2人とも働いていて、仕事の関係で母親が先に大阪に帰らなあかんとか、1日遅れて母親が来るということがあったのですが、その時に姉ちゃんと妹は楽しく過ごしていたのですが、自分だけはものすごくすごく寂しかった記憶があります。自分はその寂しい気持ちを父親に言うと、父親はだいたい田舎に帰って来た時はいつも酔っぱらっていたのですが、酔っ払って不機嫌だったので、息子が「母親がいなくて寂しい思いをしている」ということを父親が知ると、気に入らんのか、機嫌が悪いのがさらに悪くなるようなところがあって、母親は母親で悪気があって息子に寂しい思いをさせていたのではなくて、生きていくため、生活していくために働かざるを得なかったと思うので、そのなかで自分が寂しいと話してしまうと、母親が困惑してしまうというところがあって、その頃から、小さい頃から自分の気持ちを表わさない、寂しいっていうと人が困ってしまうっていうのを見ていく中で、人に伝えない、寂しいっていう気持ちそのものも否認する・認めない、感情なんて正しいとか正解はないじゃないですか。だけど自分の中で寂しいと感じて母親が困ってしまうのを見て、こんなところでこんなふうを感じるのはおかしいのだとか、寂しいということを全然受け入れられなくなってって、中学とか入ってからシンナー吸ったりとか、バイクに乗ったりなど犯罪をしているのですが、小学校2年生くらいからタバコを吸ったりとか万引きをすごくしたりとか、おばあちゃんがいたのですが、おばあちゃんの金を盗んで、その盗んだ金でおもちゃをいっぱい買って、友達にばらまいてみたいなことを小2くらいからしていたのですが、自分の親に対して感じていたこともそうなのですけど。周りに対して感じていた気持ちも、きちんと話し合っただけで気持ちを伝えていくというよりも、そこからすっと消えていく、話し合わず逃げちゃうような子供になっていました。

母親が悪いとは全然思っていないですけど、自分っていう人間に対して全然価値が無いのだという思いをずっと強く持っていて、劣等感という言葉があるじゃないですか。普通に使う劣等感は分からないんですけど、自分が小学校や中学校の頃ずっと持っていた劣等感というのは、能力的な事には関心が無かったんですけど、ただここに生きているっていうことに全く自信が持てないっていうか、「洋次郎生きているの？」って言われたときに、堂々と生きているってことさえ言えない。「生きてんねん！」っていても、「そんなのは生きているって言えないで？」って感じで、今ここに生きているという事実はあったんですけど、それに対してさえ自信をもって自分を肯定できない何かがずっとありました。中学入ってから目立ったことが起こるんですけど、小学校の3年4年5年の頃は、虫捕まえて食べてみるとか、友達のおしっこ飲んでみるとか、そういう不潔な事とかアホなことをする子どもで、それ以外にとりえが無かったので、人が自分に関心を持ってくれるものが無かったんですけど、こういうことをする事で回りが自分に関心を持ってくれたというか、逆にいうとこういうことをしなかったら自分みたいな人間は人に関心を持ってもらうことはないのだろうと思って、そういう思いで突拍子もないことをするようになっていました。当時は分からなかったんですけど、大人になって振り返ってから思うようになったのは、キャラをつくるってあるじゃないですか。素の自分ではなくて、アホな自分になることでその場所を確保するっていうか、自分がその中にいたかっていうよりも、そのなかで受け入れてもらえる自分をつくっていくみたいなことを、そのなかでやるようになっていたっていうのはあります。ただ、その中で薬物を使ったり自分を傷つけたりを شدしたんですけど。

2 自傷行為の始まり

精神病院っていうのを知っていますか、任意入院というのは自分の意思で入院するんですけど、医療保護入院っていうのは自分の意思ではなく親とか周りの人の意思で入院させるんですけど、たまに報道とかで出たりしているんですけど、措置入院っていう、自傷の恐れがあるっていうことで強制的に入院させる形態があるんですけど、自分は20歳から精神病院に入りだして48回入院を

しているのですけれど、そのうちの3回が措置入院っていうのになっています。自分の体を傷つけてっていうのが中学校を出る頃に始まって、それがなかなか止まらずにやり続けていたのですが、中学を卒業する頃に、それまでシンナー吸ったりとか友達と悪さしたりしてまあまあどうでもいいわみたいなぐらいの気持ちでいたはいたんですけど、だんだん卒業が近づいてきて周りが進学したり就職したりしていく中で自分どうなっていくかなみたいな気持ちになって。今思うと不安な気持ちとか寂しいなとかいろんな気持ちをもってたんですけど単純に自分がそう感じてたんやということではかないんですけど、当時は自分がそう感じているっていう風になんか受け止められないところがあって。同級生とかに対して、友達って言ったくせに結局裏切っていくんかとか、まあすごい悪い見方をして、で、友達のくせに結局最後の最後に自分の人生を選ぶんやみたいにお前らが裏切っていくっていうことにして、だから自分はこんなに悲しいとか不安とかを感じるんやみたい自分の感情を肯定するために誰かのせいしてみたいなことをやるようになって。その頃に自分の体を刃物で切ったりとか、火をつけて、灯油かけて火をつけてみたりとか、タバコで焼いたりとかっていう自分の体を傷つけるっていうことをはじめました。

なんかイメージの世界になっちゃうんですけど、体切ったら傷ができるじゃないですか。傷ができたならその傷の中に自分の気持ち、まあいろんな気持ちとかを詰め込んだ気になって、かさぶたができたなら蓋になって封印ができて、封印ができたなら、はいおしまいみたいな。周りに対してってよりも自分に対して、はいこれで何もないんや、なんもなかったこと、なんもないんやみたいなことを言い聞かすようにして、自分の体を傷つけてました。

ちょっと話飛ぶんですけど、精神病院に20歳から入って、現状アルコール依存症とか薬物依存症って言われた場合、一応酒も薬もやめていきましょうという話になっちゃうんです。でその時に自分依存症といわれてお酒をやめなあかんとか薬やめなあかんということが、まあまあ当然それを言われるんですけど、すごい抵抗したというか、なかなか認めて受け入れていくということができなかったんですけど、単純にお酒がなんかおいしくて酔っぱらって楽しいからそれをやめたくないとか、薬気持ちいいし楽しいからそれをやめたくないという

よりも、ただ素面にされたくないっていうのがものすごく自分強かって、自分にとって素面って、じゃあそもそも素面ってなんやってなったときに、いじめられっ子とかではなかったんですけど、中学校のときとか友達に校舎の裏に連れてかれて、校舎の裏でこの学校で喧嘩の強い奴を言えといわれて、それと言わされるんですよ。3番誰やとか、2番誰、1番誰やって全員言わされて、一通り言い終わったらバンッと蹴っ飛ばされて向こう行けみたいなことされて。普通に嫌じゃないですか、同級生にそんな扱いされて。でも、それに対してやめてくれとか、自分いややみたいいな気持ちを、ちゃんとかういえない。で、中途半端になんかやめてくださいよへへへみみたいな笑ってごまかすような、なんかこう中途半端な、なんか下手したら、からかわれて嬉しがってんちゃうみたいにとられかねへんような意思表示しかできん自分ってのが、多分ものすごくほんまは嫌で、だけど薬もなんも使ってへん時のたぶん自分はそれが自分で、あのーなんかね、学校とか社会とか大人っていうすごい力をもったもののなかで、なんかいいように扱われてる、消費されておしまいみたいな。それに対して自分よりおっきい力に対して何一つ抗えないというか、対抗できひん非力な自分みみたいな自分が自分にとって素面で生きているっていう状態。だからなんかその自分の力を得て、そんなかで自分でやっていけたらいいという思いがあったのかなってのがあります。さっきの虫を食べたりおしっこ飲んだら友達が構ってくれたっていうのと同じで、それ以外何のとりえもなかったのも同級生とかから、かかわってくれることはなかったんですけど、犯罪をしたり警察に捕まって取り調べ受けてとか、家庭裁判所に出頭したりしだした頃に、周りがそのいろいろ聞いてくれたんですよ。シンナー吸ったら気持ちええんとか、警察の取り調べて何してんのか、家庭裁判所って何するところなんみたいに。それ以外のことで自分が聞かれて答えてあげるみたいなことが全くなかったんですけど、そういったことだけは周りが聞いてくれて、自分がしゃあない教えたるわみみたいな、なんていうかな、ちょっと自分が優位なところにいるじゃないですか、周りが聞いてくる、で自分がそれに答えるみみたいな、そういうなんかこう自分が優位で自分主導で作っていける人間関係が少なくともそれをしてれば保てたんで。なんか自分がコントロールしていける関係性というか、自分が

したいような人との関係が作っていきけるみたいなことを、ただその中で感じてきました。当時の自分にとってはシンナー吸ってそれが犯罪になるとか、家族に迷惑かかるとか社会に迷惑かかるとかっていうことも当然わからないわけではないんですけど、それ以上にそういう中で自分がどうやって生きていくかということのほうが当時の自分にとっては重要やったのかなというのがあります。

3 父親との別れ

ただそのまま中学を卒業したんですけど、どんどんどんどんやっぱシンナーやめれなくなっていったんで、アルコールとか薬物では「関連問題」って言い方をするんですけど、お酒・アルコール依存症、そのお酒がやめれないとか、お酒飲んじゃうとか、薬の薬物依存の人が薬物を使ってしまうっていう。それ自体の問題と、それに関連する問題。例えばお母さんがアルコール依存症の人や子どもに虐待をしてしまうと、飲酒運転とかもそれに近いと思うんですけど、お酒欲しさに窃盗するとか、お酒飲んで仕事を遅刻ばかりしてクビになるとか、お酒そのものというよりもそれに関連するいろんな問題がどんどんどんどん起きだすんですけど、自分にとってシンナーとかも全然やっぱやめれない。持てることも犯罪になったし、それを入手するために窃盗を繰り返すみたいなことも起こってんで、どんどんどんどん病気とはいえ警察に捕まって鑑別所に入って、少年院に入ってっていう風な状態になっていきました。

自分、父親がずっとアルコールをずっと飲んであったんですけど、自分16歳の終わりから少年院に1年間入って、17歳の1年間は少年院で過ごしたんですけど、その時にその父親がもう何回目かの一般の病院に入院してて。自分が少年院に行く前の、4回目の鑑別所入ってるときに父親が危篤になって、アルコールの飲みすぎで肝臓の癌で死んだんですけど、その時に、成人の事件、刑事事件と少年事件は全然違うっていうか、少年法とかがあるので、少年院ってなんか罰するようになるじゃないですか。罰っていうよりもたぶん保護処分として、本人にとってどうしていくことが更生できるんかっていうところで、罰を科すというよりも本人に役立つこととして少年院に入ってもらいたいなことを少年のためにやってると思うんですけど。自分もそういう流れで少年院

に行ったんですけど、その時に父親が鑑別所に行ったときに危篤になって、勝手に裁判所の方から誓約書書かされてやったんですけど、病院に行ってお父さんを死ぬのを看取りなさいっていうのを言われました。

一応病院には行ったは行ったんですけど、そのまあ、もう死んでしまうような姿で意識もないような状態やったんですけど、その父親を見て、父親のことをすごい好きとかではなかったんですけど、それでもなんかこう、面会に鑑別所に来てくれた時に、あのーすごい無口な人やったんですけど、無口な人なりに面会室で。面会の時だけジュース飲めたんですよ。それでジュースを買って持ってきてくれて、二人がこう面会室で座って、全く二人共しゃべらへんっていうふたりきりなんですけど、でもその時の光景とか、あと鑑別所に入って家庭裁判所に行って少年審判するんですけど、その護送バスに連れられて、鑑別所に行く途中にパッと開けて外見たら、母親もおったんですけど母親と父親がいて、なんかもう表情がないような姿を見て、まあ自分がすごい苦しめてるんやろうなって思ったこととか。そのいろんなこと、おやじのこととか思い出しながら、大好きとかではなかったんですけど、なんか申し訳ないとか、ありがとうとか、で、やっぱ死んでいくってことに対して寂しいなみたいな、さよならなんやなみたいな、あの色々あったんで。ただ、そのときに、鑑別所からそこに連れてかれたときに、親戚がいっぱいいて、親戚から言われたことが、お父さんがこんな時に、お前どこ行ってんねんみたいなこと言われたんです。自分にとっては親戚が近所に住んでるのでわからんわけないやろみたいな思いもあって、当てつけのように言われたと思ったし。もう一つは父親に対していろんな思いがありながらも、全く自我を改めようとしなかった自分、おやじとか家族とか周りの人が嫌がったり苦しんだりするっていうことを分かって、自分が自分の生き方を、選んできたってのがあって、あのーなんていうかな、自分の気持ちと自分のやってきた行動というか生き方がばらばらすぎて、なんかもう自分の中で訳が分かんような状態になって。

ただでもそんな状態になりながらも、もうすぐ父が死ぬんや、父が死ぬんやなってことが分かったんで、とりあえず近づいて生きてるうちに触りたいなと思って触りにはいきました。で、そんな時にあの、なんか、こううまく言えない

ですけど、悪に生きるんやって決心したんです。この悪は悪魔の悪なんですけど、悪いことたくさんしてとか、こうひどい、人に迷惑をかけたり、犯罪をいっぱいしてきたらええねんとかの思いの悪っていうよりも、なんか自分の気持ちを一切切ないことにして生きたらええねんっていうか。その父親に対していろんな思いを持ってたとしても、結局自分がそういう風に生きひんかったんや、生きひんかったし、そしてその周りも苦しんで、で、ヒトも死んでいく。で、そういう風に生きようと自分の生き方を改めようとせえへんやったらそういう風に感じるって結局無駄やんっていう、それによって人もいやな思いするし、自分自身も痛い思いするんやて。だから一切切ないことにしろみたいなことを、なんかこう、自分に課して、そうやって生きていくんやみたいなのを課す、背負わしたみたいなのがあります。で、それものすごい長い間かかって、なかなか取れなかって、なかなか時間かかったんですけど。時間かかりました。

4 アルコール依存症

また、そのまま少年院に17歳から一年間入って、18歳からまた外に出てきて、外に出てきてから、しばらくシンナーはやめたんですけど半年ぐらいしてからまた吸い始めたのと、あともう一つは水商売を始めたので、大阪のなんばとか梅田とかそのあたりで水商売してたんですけどそっからもうお酒をどんどんやっぱ飲むようになって、で最初からブランデーを1本とかそれ以上を飲むのが当然のような職場で、クローゼットとかでひっくり返って、酔っぱらってひっくり返ってるんですけど、起こされてトイレで吐いてこいって言われ、でトイレ行って吐いて、最近お酒飲まないんであんまりわからないんですけど、二年生の方ってお酒飲めるんですか？まだなんですか？

【司会】飲めない人？まだ飲めない人？（パラパラと手が挙がる。）

そのお酒吐く場合ってあるじゃないですか。で、吐くときって気持ち悪いから吐いて楽になりたいから吐くと思うんですけど、その水商売して働いている

とき、その一緒に働いてる子らにもトイレで吐いてこいと言われるんですけど、それはなんでかな、気持ち悪くて楽になるために吐くっていうよりも、吐いて胃の中空っぽにしてまた飲めっていう、で、まあ飲めば売り上げがあがるんで、どんどんどんどんそうやって飲んでって。だからトイレとかも血がバーッと飛び散ってるんですけど、それみんな飲んだんを全部吐いて。で、それでも飲んで、売り上げあげて。それが仕事やみたいな感じやったんで、自分もどんどんどんどんそういう風に飲んでくようになっていきました。で、まだ当時18歳、19歳ぐらいで、まあ若いってのもあったんで、えーカッコも付けたいし、金も欲しいし、モテたいし、なんかスゲーなと思われないし。どんどんどんどん、そのまあ今考えたらまともじゃない世界やと思うんですけど、でもその中で、どんどんそっちの世界になじんでいくような生き方をしていきました。で、その当時は、まだ依存症と言われてなかったんで、その依存症って病気もあまり知らなかったし、その症状も知らん、あのアルコール依存症のどういう症状があるのかも全然知らなくて、唯一あったのが、犯罪として扱われてきた、薬物依存は犯罪でしょっていう。で、なんかあの牢屋に入れられて、こう布団かぶってからのうわーって喚いてるようなイメージしか、自分は薬中に対してなかったんですけど、なんかこう、当時は自分がまだ病識がなかったんで自分がどういう状況になってるかわからなかったんですけど、今思うと、何ていうかな、お酒を隠れて飲むとか、嘘ついて飲むとか、いろんなことに対して色々言われたりするんで、それで人ともめごとを起こすっていうか喧嘩になってまうとかってことがどんどんどんどん起こってて。あんまりいい話じゃないんですけど、キャッチセールスとかするんですよ。梅田とかなんばとかに行くと、一応その時は素面で行ってくださいって言われて素面で行くんですけど、途中ぐらいでコンビニとか行ってお酒をちょっとだけ飲もうと思って飲んで。で一回体にアルコール入れてしまうと、15分ぐらい持つんですけど、15分ぐらいしたらそわそわしだして、またトイレ行ってきますいうて、またトイレ行くふりして、またお酒を飲んで、また15分ぐらい、ほっと体が楽になってるんですけど、でもまた15分、20分したらまたこうお酒が飲みたいっていうか体にアルコールをつぎ足したくなって、またトイレ行ってきますみたいな、まあうそをついて

行って、でまあ当然5回も10回もトイレに行ってきますって言うてるとばれるじゃないですか。明らかに酔っぱらって帰ってくるんで、お前明らかに飲んでるやろみたいになって。まあでも飲んでるって言えないんで、飲んでませんみたいな。で、まあそのことで逆ギレを、喧嘩なんてこともどンドン飲酒するごとに、こう怒ってたんですけど、その状態に自分がいても、その自分が依存症ということ、病気その物がわからなかったし、自分の身に起きてることが何だかがよくわからへん状態で、永遠にそれを繰り返しました。20歳で初めて精神病院へ入ったんですけど、そんな時に精神病院に入って、病気として精神病院に入ったんですけど、19歳20歳ぐらいで最終的にお店も全部クビになって。酒を抜く、お酒を飲める仕事で飲み方がおかしくなって、もう店で使いもんにならへんって言われてクビになったんですけど、そんな時になんかアイデンティティみたいなものかな、なんて勝手に思ってるんですけど、それまでの不良してた自分と水商売自分ってのがギリギリなんかこう、これが俺や！っていうか、何とか自分って人間を支えてきたんですけど。ただその時にその不良の世界でも使い物にならなくなって、で、水商売の世界でもクビになって、「お前なんかいらんわ」みたいになって、使い物にならなくなった時に、なんか自分が一体全体何者なのか全然わからなくなって、自分が崩壊したような気持ちになって。

その時に、その後も何回も死にたいと思って自分の身体を傷つけてたんですけど、その時に死にたいと思ったのは、ちょっと種類が違う、「なんか死にたい」気持ちがその時はあって、ただそういう思いがあってもお酒は止まらないし、シンナーも止まらないし。自分の身体を、実家というか親のところに住んでいたんですけど、自分の身体を傷つけて。お金が全然なかったんで毎日出るんですけど、コンビニ行って。で最終的に刃物持ってコンビニ行って、それで事件を起こしたとかじゃないんですけど、だけどそこまでしてでもお酒を手に入れて、それを飲まなあかんのやっという状態に。お金が全然自分はなかったんで、コンビニ行って、お酒を盗んで、で、その盗んだお酒を飲んでっていうことが完全にもう止められないような状態になって、で、最終的にその刃物持ってコンビニに行って、それで、事件を起こしたとかではないんですけど、だけど、

そこまでしてでもお酒を手に入れてそれを飲まなあかんねやってというような状態に追い詰められてました。

ただそういう状態になって、でも自分は病気ってのはわからなかったんで、どうしたらいいかは全然わからなくて。ただその時自分殺すか、人殺すぐらいみたいな状態になってたんで、警察を呼んで。警察やとなんかこう力づくで押さえつけられそうじゃないですか。力持ってて。治療がどうこうっていうよりも、とにかく力づくでもいいから止めてくれっていうか、人殺す前に自分殺す前に止めてくれって思って、助けてくれって警察を呼んだんですけど。たまたまその来てくれた警察が自分の状態を見て、依存症じゃないかなっていうことと、「精神病院というところで、その依存症の人らが治療してるから行ってみますか。」ってこと言ってくれたんで。初めてそこからその医療に繋がってっていうことがありました。で、ただ 依存症ってなんか否認の病とも言われてるんですけど、なかなかその自分もその依存症って言われて診断されて、入院しても、なんか自分から依存症とか、全然やっぱわからなかったです。その認められなかった理由の1つは、年齢が若いっていうのもあって、20歳ぐらいで、アルコール依存症って言われてる人が当時は全然いなかったのと、もう1つは薬物を最初に自分は使ってた、その薬物がない時にそれに変わるものとして、アルコールを飲んできたっていう思いがあったんで、その病気がそうさせてるっていうのがなかなかわからなくて、自分そうやって生きていきたい、それを使いたいって思いで、自分は使ってるって思いがあったんで、なかなか依存症っていうか、それが病気で、それは治療していくことで良くなっていくってことが、なかなかその理解ができませんでした。

5 自助グループとの出会い

一応、今働いてるリカバリーハウスいちごっていう、依存症の人たちを支援していく事業所とも24歳の時には1回繋がってはいるんです。入院、繰り返しながら。いちごに行ってみますか。みたいなことも言われて、行ったりもしてたんですけど、その当時は。今はいろんな仕事みたいなこともやってて、一般就労していくようなメンバーさんとかもいるんですけど、当時は20年ぐらい前

とかなんで、まだなんか内職ばかりしてて、当時の自分は20歳で初めて精神病院に入って、入院を延々と繰り返したんですけど、それでもアルコールとか薬物を使い、使わないでさえすれば、世の中で活躍できるみたいな思いが自分はずごくあったんで、どうしてもそんな自分が内職をして、で支援者の人になんか褒めてもらって、そこに通ってみたいなことが、なんで俺がそんなせなあかんねんみたいな思いしかやっぱなくて。なかなかその自分、自分がどう今、現在どうなってるかってのがなかなか見えませんでした。で、もう1つがその、さっきその何度か高知に来ましたって話をしたんですけど、自助グループで高知って、多分断酒会がすごい有名ですよ。で、断酒会とかAAとか薬物だとNAとかいろんな自助グループって、なんかわかりづらいかもわかりんですけど、依存症の人たちが集まって、断酒会さんは、多分会費を取って例会を開催してると思うんですけど。AAの人とか会費を集めて、それで会場を借りて、ミーティングをして、みたいなことを依存症の本人の人たちが集まって、辞めていこうとしてる集まりなんですけど。

そういうところとも、一応20歳の時には繋がってはいたんですけど、あの、まあ、なかなかそのアルコール依存症っていうのが認めれなかったのもあったし。だからやめなあかんねんやろうな、まあやめろって言われて、やめなあかんのかなって思っていたんですけど、さっき言ったみたいに、自分がしたくてやってるんやと思いがあったんで。だから、したくなくなったら、自分がやめるんやって思いとか、そのやめるやめへんは自分が決めるんやみたいな思いもやっぱすごくあったし。で、もう1個はそのお酒とシンナーで鑑別所に入ったり、少年院に入ったり、精神病院に入ったりすることが起こってても、まだそれを使いながらやっぱ生きていけるっていう思いが自分あったんで、お酒、薬はまあ使えないにしても、自分が思い描く、生きていくってことがやれるって思いがあったんで、なかなかミーティングに行くと、仲間と一緒にやるみたいなことが受け入れられないでいました。

結局20歳から30歳までの間に。さっきも話したんですけど、48回、精神病院に入院をして。で一応、精神病院なんで、治療はしてもらってるはずなんですけど、精神科やからか、依存症やからかわからないんですけど、なんか治療し

てるってあんま思ったことがないんですよ。どっちかっていうと、その社会に
いると害を与えるから、社会にとってね。だから、精神病院に放り込まれてい
るんや、みたいな面しかやっぱなくて。学生の方が、将来どういう仕事とかど
ういう活動されるか、ちょっとわからないんですけど、もし精神病院とか、そ
の中で生活していく人とかと関わるようなことがあったら、なんか色々考えて
ほしいと思うんですけど。自分が今思うことは、治療のために精神病院に
入ってるんですけど、全然そのなんていうかな。うん。実際に…ごめんなさい、
うまいこと話せなくて申し訳ないんですけど、自分30歳から33歳まで、刑務所
に入って、33歳から刑務所出てきて、そこからお酒を1回飲んでしまって。で、
そこから、本当にアルコール依存症やってことが納得ができて。自助グループ
に行ってってということが始まったんですけど、その時に初めて素面で生きてい
かなあかんってなった時に、めちゃくちゃ困ったんですよ。

ただ、自分がしたいこともわからへんし、できることも全然わからへんくて、
どうやって生きていいんかは全然わからなかった時に、本をちょっと書いて
出したんですけど、そこにも書いてるんですけど、「施設太郎」みたいな。少
年院とか刑務所とか精神病院みたいな、その管理・監視されてる世界では生き
ていけるんですよ。自分が考えなくても、これしろって言われるし、これはす
るなって言われる中で生きていける人間は作られていくんですけど、実際に自
由な社会ってか、自由な世界に行って生きていく時って、自分で考えて、自分
で決めて行動取るわけじゃないですか。だけど、そういった力がほとんど育て
ないっていうか、逆に言うと、育たさないっていうか、刑務所でうまいこと
やっていける人間を作っていくっていうのが、多分、刑務所にも精神病院にも
あったと思うんで、なかなかその自分で生きる力が付かなかったんですけど。

そんな中で、自分が治療を受けてるって思いも当然なかったし、で、もう1
つはその外に出て生きてみたいとか、幸せになりたいとか、自由に生きて
みたいみたいな思いも最初はあったんですけど、だんだん繰り返して。精神
病院に入ることが繰り返される中で、なんかもう自分の気持ちを信じひ
んっていうか、自由になりたいなって思っても、気付いたらまた精神病院にい
るっていう中で、なんか生きていくことに対して希望を持つとか期待する、で

それが高ければ高いだけ、そうなれない自分がいて、落胆する、失望するんですけど。だから期待が大きければ大きいだけ落ちるのが大きいわけじゃないですか、高低差が広がって。そんだけダメージが大きいという思いの中で、最初から、もうどうでもいいやんていう、生きていくのがどうでもええんちゃうみたいに思うことで、逆に言うと、それ以上、痛い思いをせんでいいっていうか、それ以上傷つかないために、なんかそういう風に思うようになっていきました。

6 独房での体験

なかなかそういうふうに思う気持ちが拭えないまま来たんですけど、自分、刑務所に30歳から33歳まで入った時に、自分が悪いことして入ってるんで、その中でなんで入ったかとか、どうこうっていうのはそんなに話すことは無いんですけど、自分にとっては初めて自分自身と向き合うしかなかった状況があったのと、あとは、あんま時間が無いんでゆっくりは話せないんですけど、なんかこう最初の一年半は雑居房って言う集団の部屋にいて、残りの一年半は独房に一人で入ってたんですけど、その時になんかこう独房で心臓が見えたような体験を自分はして、で、まあ当然心臓見えないんで、幻覚ですかって言われたら、ちゃうような気もするけど、幻覚なんですかね～みたいな感じになるんですけど。とにかく、自分がその独房で一人でいたときに、その目の前に心臓がバーンって出てきたような、見えたような気がして。ちょっと大ききなんですけど、生まれて初めてその変わりたいって思ったんです。小っちゃい頃から、あんま、まともじゃなかったんで、周りからも、ちゃんとしろとか悪いとかいろいろ言われてきても、なかなかそういう理解が出来なかったり、なんで変わらなあかんねんって思いもあったし。ずっと中学ぐらいから自分の身体を刃物で切ったりとか自傷行為をしだしてから、周りは自分、その身体を大事ですよとか、命は尊いですよって言われる。教育でも言うじゃないですか。大嫌いなんです。なんか命が大事って感じれる人もいるんかもわからないんですけど、でも感じられん人もいるやんていうね、だからその感じれる人たちの価値観を押し付けんといてほしいっていうのもどっかにあって、ずっと自分の身体を傷ついたりあの、あとごめんささい。お酒飲んだり薬使ってる人ってなん

か楽しそうに見えるじゃないですか。カーって酔っぱらって、喜んでやるように。でも、確かにそうやって薬使ったり、お酒飲んだりする時期もあったと思うんですけど、途中ぐらいから、自分をほんまに殺したいとか、自分を痛めつけたいとか、壊してしまいたくて、お酒を使って、薬を使って、自分の身体を傷つけて、ということ止めれん。そのためだけにするようにやっぱりなっていて、で、そこから脱却するか幸せになるみたいなことを絶対さしたらあかんのやっていう思いの中で、自分を傷つけて傷つけてっていうことを続けるしかなくなっていったんですけど、その生きようとする心臓がそこに見えたときになんか、あの、ちょっと、生かされて生きているっていう言葉ってあるじゃないですか。で、なんかあんまりちょっと綺麗事みたいな言葉なんであんまり好きではないんですけど、だけどその時その心臓がバンって自分の中で見えたときに、自分の意思は自分を殺したいと思っていたにもかかわらず、自分の中で生きようとするものがずっとこう動き続けてくれてるって思った時に、少なくとも自分の意思ではない、だけど生きようとするものが自分の中にあるって思った時に、なんか愛おしさとか、あんまうまいこと言えないんで勝手に愛ってつけたんですけど、ほんとに愛があるっていう風に、こう思いました。

で、今までずっと自分が生きてきて、あんまり良い生き方を全然せず、その卑怯なずるい、人傷つけて迷惑かけてみたいなの、ずっと生きてたんですけど。その中で、こう周りから言われたときに自分の中でいつも思ってたのは、「お互い様やん」っていう、なんか自分の中にも愛は無いんやろうけど、人の中にも、この世のどこにもそんなもんあらへんやんって。で、自分が卑怯なこととして何かをしても、「いや、でもお互い様やん」っていう。この世のどこにもそんなあったかいもんは無いんやんって。だから、どうやって生きてって良いやんっていう思いが自分の中ずっとあって、変わるとかちゃんとするっていうことをどうしても選べなかったんですけど、なんか、こう生きようとする心臓があって、それがほんとに自分の中に愛があったって思った時に、辻褄が合わなくなったんですよ。自分が、愛がそんなもんどこにもあらへんやんって思って、自分が生きてきたことを肯定してきたんですけど、愛があったってなったときに、自分が生きてきたことを肯定できなくなって。まあ周りの人には申し訳ないんで

すけど、なんか、全部勘違いで自分生きてきたんかなっていうか、空回りしてきてだいぶヤバイなっていうか、その自分が分からへんまま生きてきて、その時に、もしかしたら、自分がそうやって生きるんやって思ってきたけど、一切の望まん事をし続けてきたんかもしれへんって思ったときに、で、自分が薬物を使ったり自分の身体を傷つけたり、まあ不良したりだとか、いろんなことしてきたんですけど、これがその心臓一個分、拳一個分の心臓やとするじゃないですか、で、自分はこれを100倍にせんと生き抜かれへんねやとか、人の中で勝たんとあかんのやとか、もっと大きせなあかんとか、逆に言うと、一個分でしかないことを「ちっぽけや、そんなんいらん」って卑屈になったりとか、とにかくそのそのままを自分は一切許そうと、認めてあげようとしてできなくて、生き抜くために、いっぱいいっぱい、いろんなことしてきたんですけど、だけどそんな時に、何か一個分の心臓で生きようとしてるなんか大事さみたいな、すごいあったかいもんを感じたときに、なんか人にどう思われんのかも気にする人間なんですけど、だけど人から「アホォ」とか「しょおもな」とか「弱虫」って言われてもまあ、「そりゃそれでえいやん」、自分がその一個分で生きようとしてるもんに対して、誠実というか、正直にちゃんと向き合おうとさえしてたら、自分はそれでいいと思った時に、変わりたいって言う風に思いました。

7 出所後の支援

それが32歳3歳くらいで、その後、33歳くらいで刑務所を出たんですけど、もう一回リカバリーハウスいちごっていうところに通いますかって言う話とかを、刑務所に来てくれたりしてたんで、そん中で話をしてて、で、まあ通いますってことで行ったりはしたんですけど。ただ、その行ったときにいちごの職員の人とちょっと揉めたんです、いろいろ揉めて、で、揉めたときに腹立って「やってられへんわ」って、酒をまた飲んだんです。「やってられへんわ」って酒飲んでたんですけど、でもそんな時に、ただ20歳で依存症って言われてからも、なかなか自分は依存症ということ認められないまま来たんですけど、刑務所を出て、もう一回いちごに行くって話があって、だけどケンカしてやってられへんわって言って酒を飲んだ時に、ちょっとこれも大げさに聞こえるかもわか

らないけど、ほんとに初めて自分が飲んだ酒に対してクエスチョンマークが湧いたんですよ。「ここで飲むの？」みたいな。「えっえっ？ほんまに？」みたいな。だから自分が飲んだお酒なんですけど、なぜ飲んだかが理解が出来なくて、どう考えても自分にとっては、お酒とか薬使うと精神病院とか刑務所に自分は入ってしまうので、やった結果ってすごい重たいわけじゃないですか。だから、例えばAさんに対して腹が立ったということと刑務所に三年、四年入れられてしまうことを天秤にかけたら絶対損なんですよ。だけど損な選択を簡単にやってしまうのが、やってしまうんですけど。でもそれが病気なんだということをやっと納得ができたときに、さっきも話してた自助グループとか、断酒会とかAAというところに自分から行く、行くっていうか、行くしかないという風に、やっと認めることができて、ミーティングに行ったら、なんかいろんな人おるし、変な人も多い。変な人もいっぱいいるんですけど、だけど少なくとも自分にできひんこと、みんなやれているわけじゃないですか。お酒を止めるっていうことだけは少なくともやってはったし。で、自分が、自分のお酒をやめれない、やめれないってことは、やめれなかったんで、そこは人の力を頼るしかないっていうことを受け入れることができたのかなと思います。

そこから自助グループ、そのAAとか断酒会とか、いちごは喧嘩してやっられへんって一回飛び出したんで、3年半くらいはいちごには全く近寄らずやったんですけど、そのときに、ずっと治療とか支援を自分は受けてきたんですけど、なかなかわからなかったです。自分が支援を、実はいっぱい受けているっていうことに。分かってなかったんですけど、ただその刑務所を出てくるときに、ずっと母親が関わってくれていたんですけど、今回はもう自分でやってくださいっていうことで、母親が手を引くっていうことを言ってくれたんですけど、そのときに、当然自分が暮らす場所がなかったんで、生活保護を受けていくとか、あと、刑務所を出た日に精神科病院の受診ができたり、大阪だけではないと思うんですけど、精神障害とかの手帳を持っていたりすると、地下鉄とか市バスに無料で乗れる券を配布してくれたりとかして。そういったいろんな支援とか制度を使わせてもらうことで、本当に衣食住を確保させてもらったことで、ミーティングについてお酒とか薬とかを止めていくっていうことに、

本当に集中ができたので、それはすごい助かったというか、すごい支えてもらって。一切仕事のこととか生活のことを考えずに、お酒と薬を止めていくってということだけに集中ができたのかなっていう風に思います。で、その中でお酒も薬も、一日一日やったんですけど、止まっていったら、リカバリーハウスいちごに、喧嘩別れしたんですけど、もう一回利用者として通ってみたいと思って、そこに通うようになって、途中でヘルパーの資格をとったんです。ヘルパーさん何年かしていると、介護福祉士を取ったりするじゃないですか。介護福祉士を取らせてもらって、もともと自分、中卒で、少年院にいったんで、それ以上の学歴がなかったんですけど。ちょっと精神保健福祉士とか社会福祉士に興味があって、とりあえず、通信高校は卒業したんです。2年3年くらい前なんですけど。でまあ、その後なんかお金もないし、時間もないしで全然先に進んでないんですけど。そういう中で、5年前にリカバリーハウスいちごで正規の職員として働くようになりました。

今は、支援者として、同じアルコール依存症とか薬物依存症の人と関わりながら、仕事として関わったり、一緒にミーティング行ったりみたいなことをして生活しています。あと、仲間の大事さとかではないんですけど、自分がアルコール依存症って言われて、なかなか認められなくてやってたときに、いつも思っていたことが、アルコールとか薬物を取り除く、取り除きたい、取り除けるといことばかり思っていたんですけど、33歳でもう一回お酒を飲んで、ミーティングに行くしかないって思った時に、アルコール依存症者として生きるってなんやとか、アルコール依存症者の人生ってなんやっていうことをすごく考えたんです。だからそれまでは、なんかアルコールと薬物の問題を取り除いたら、問題のない人として生きていくつもりでいたんですけど、本当にお酒をこんな簡単に飲んでしまうんやって思った時に、アルコール依存症者として生きていかなあかんっていうか、取り除いてなくなるっていうよりも、二度と変わらないものを持った自分としてどう生きるんやっていうふうなことをやっていくしか多分ないってということになった時に、本当に仲間の大事さっていうか、そういうことを感じました。で、なんかちょっと適当かもしれないんですけど、例えば、いろんな体の病気とか障害を持たれた方がいたときに、それ

を認めていってもバリアフリーが全然整っていなかったら、自分のそういうところを認めたくないじゃないですか。それを認めてしまうと、みんなができることをできなくなってしまうので。だから自分にとっても、アルコール依存症とか薬物依存症を認めて、そういう人間として生きてくってなったときに、全く希望も何もなかったそういう自分を受け入れて生きていこうと多分思えなかったんですけど、本当に仲間、同じ依存を持った人たちとの出会いとか、つながりの中で、素面で生きるっていうことに対して一切関心がないっていうか、希望も何もなかったんですけど、本当に生き生きと生きている人たちがいて、そうやって生きるのも、生きてみたいなあっていうか。なんかね、百人くらい集まってコンベンションをしていた時に、みんなわーわー騒いでたんですよ。アルコール依存症で、止めている人やったんですけど、普通に見てたら、この人らアル中ってわかるかなって思うぐらいはしゃぎまわっていた、なんか変な人ばかりやったんですけど、でもそのときに、そこに自分の身を置いて、そこに一緒にいたんですけど、関係者の人がそこにバツて入っていったら、ほんまにこの百人の人はアルコール依存症に見えるかなっていうくらい大騒ぎして、本当になんですかね、好き放題素面で生きてはる人がそこにいて、そのときに、それを体験できたときに、自分がアルコール依存症っていうものは、どうしようもないので、まあ、認めていくしかないんですけど、でも認めても、そんだけ好き放題生きていける生き方がそっち側にあるんやったら、なんかもう、とっととそっちに行った方がええやんっていうか。すごく、認めて生きていくっていうことがハードルのめっちゃめっちゃ高かった自分が仲間と出会って、仲間が生てくれている姿が、そのハードルをものすごい下げてくれて、依存症の自分としてどう生きていくっていうことをやっていくことができたのかなっていうことがあります。

8 「地球はちっちゃい」

あとちょっとパワーポイントを見ていきたいんですけど。話全然まとまっていなくて申し訳ないんですけど。あとちょっと自助グループのことは、いろいろ事情もありましてあんまり詳しく話せないっていうのもあって、申し訳ない

んですけど。アメリカのミーティングに結構頻繁に行くんですけど、今年も9月の1日から10日までアメリカにいたんですけど、めちゃくちゃ若いんですよ。今後、自分も研究とかしたいなと思うんですけど、日本やと、薬物依存症の人は10代でもたくさんいたんですけど、アルコール依存症っていう人たちが病院に行ったり、自助グループに行ったりとかして、社会の中で見える存在として、10代のアルコール依存症としてほとんどいなくて。すごいそれに対して、自分は違和感があるんですけど。いろいろ薬物依存症とか、その薬物依存症から刑務所入ったとか、精神病院入ったっていう人を、社会の人たちが、いろいろ怖いとか悪い人たちだっけって言い張るんですけど。でも、実際にはどんな人か知らんってことが多くて、あのイメージの中でこう作り上げているってことが多くて、それやったらその実際にそのアルコール依存症とか薬物依存症で、過去はまあいろいろあったけれども、使わずに生きる実際に使わずに生きることができると、なんか、みんなの中でこう知ってもらったり、こう、お互いに理解しあえるために、日本でもやってるんですけど。

それとは全く違って、向こうはヘロインであったりとかに色々出会ったりで、ものすごい人がオーバードーズで死んで、それが日本で、例えば違法薬物を使って死んでしまったとか、刑務所に入ったと言った時に、自業自得でしょみたいなその自己責任にやっぱなってしまうじゃないですか。で、まったく悪いことがないとかではないんか分からないんですけど、なんかこのパレード一緒にした時に、あの小っちゃい金髪の女の子が持っているのは、その周りで死んだ人なんですよ。で、それをちっちゃい女の子が多分、身内のあのお兄さんとか、親とかが死んで、本当にそのすごい数の人が死んでいっている中で。前日は市役所の職員がみんなヘロインかなんちゃらかんちゃら書いたTシャツ着て歩いてましたけど、本当に色んな人がそのパレードに参加をして。で、当然その薬物を使って死んでいたその友達とか、家族とかもすごい辛い思いをしてると思うんですけど。でもなんかその薬を使わざるを得ん中で使っていて、それによって命を落とすっていうことも、なんか被害をその人自身も受けるんかなっていうことをすごい感じたのと、みんなですべてを考えていこう、取り組むこととしてやっているようなことがあって。そういったことをすごく

感じました。

すみません。次お願いします。これはオハイオ州の大学に行った時なんですけど、高校でもアディクションハイスクールみたいのがあるっていうのは聞いて、行ってないので、どんなところは判らないんですけど。ここが大学で、大学の講義とか普通に興味のある授業をしている中で、ミーティングをやるような部屋があるんです。で、自助グループの情報とかもたくさん提供しているんですけど、ここがそのまま、ミーティング場になって、例えば大学生のAさんとか、Bさんがミーティングに来て、普通にアルコール依存症の何々やとかあの薬物依存症のAです、Bですって言いながらミーティングして、ゼミではまた授業に戻るみたいな。

高知大学は、ごめんなさい、来て間もない時間しか経ってないんで分からないんですけど、大学とかでも未だに来さしてもらっても、ポスターが貼ってあって、例えば注射器の絵が描いてて、使ったら退学ですみたいなポスターが、やっぱ未だにあるじゃないですか。高知大学は知らないんですけど。普通に関西とかの大学に行っても、普通に違法薬物を使ったら、もう停学退学ですみたいな。犯罪ですから二度と戻ってこれませんよみたいな感じなんですけど。で、それをこういうふうにミーティングすることで、お酒とか、薬を止めていくことで、別に大学生をやめる必要はないっていうか、必要な支援をしたりとか、仲間と出会って支えてもらうことで、全然薬を止めて、で、薬を止めていきながら、その大学生を続けているってことを、すごくやろうとして、自分はすごいなと思いました。次お願いします。

これはドラッグコートっていうのをご存知ですかね？ちゃんと自分も分かってはならないところもあるんですけど、日本やと、多分同じような法律で、窃盗も薬物事犯も、多分同じように裁いているのかなと思うんですけど、ドラッグコートに関して言うと、色んな形で薬物のこと、薬物依存のこととかを理解をしているような、トレーニングを受けているような人たちが裁判を構成して、その人にとって、何が必要かっていうことをやっていこうと、してるのかなっていうのがあって。で、自分が行ったときも、裁判官の人も来てくれたり、出廷してくれたりして、物凄い丁寧に、来てくれてありがとうございます感じ

で普段自分のミーティングでしゃべっているような、「ちゃんとミーティング行ってますか、仲間出来ましたか？」みたいなことをやり取りをしているようなところがあって、なんかよかったなって。

最近でいうと何て言うんですかね。メンタルヘルスとかトラウマとかそういうことが背景にあって、事件になるみたいな。最近やとDVを受けていた方が、事件としては子供を殺してしまって。だけどそれが殺したくて殺したっていうよりは、その本人が受けてきたものの影響でそうやってきたときに、単に加害者っていうよりも、何をどうして行くとか、その方にとっていいかっていうことを、ちゃんとその考えられる人たちが裁判をして行くっていうことやと思うんですけど、そのまあ薬物のことかなというふうに思います。

最後はもうほとんど刑務所に行ったっていうだけの話で、特に話すこともないんですけど、今日このパワーポイントを見てもらったのは、見てもらってどうこうっていうよりも、自分にとって、日本のいろんなアルコール依存症の人に出会えた事も、すごい自分にとってはショック、いい意味でショックやったんですけど。本当に海外の、特にアメリカとか、ほんとに16歳とか17歳とか18歳で実際にもミーティングに来てて、お酒とか薬を止めながら、大学生とか、高校生をやって生きている人たちがたくさんいて、そういうなかで、依存症として生きる中でも、すごい自由なんやってことを、多様で自由なんやってことを感じさせてもらって。

で、あとごめんなさい一つだけいいですか？あつ、もうパワポは大丈夫なんですけど、その一人その仲間が言ってくれたことで、めっちゃカッコイイなと思ったことで、地球がちっちゃいって言った仲間がいたんですよ。地球は地球のサイズなんであんまりちっちゃいこともないと思うんですけど。だけど本当に、その人が言ったその前日はカリフォルニアにいて、でも次の日、日本の仲間の相手が日本に来た、っていうぐらいに、その本当に世界中で仲間同士がその地球がちっちゃいぐらいの中で、つながり、やってるっていうか。で、本当に自分が依存症と言われて、精神病院に入って、刑務所に入った時には、本当にそんな風に生きられるっていうふうに全然思えなかったんですけど、だけど依存症持ちながらも、そういうふうに生きていけるって事、仲間たちと一緒に

こう感じながら生きているのかなっていうのがあって。だから、それを最後に一言ちょっと言わせていただきたいと思います。すみません。なんかまとまりがない話になってしまったんですけど、これで一旦終わりたいと思います。どうもありがとうございます。

【会場】（一同拍手）

9 質疑応答

【質問者1】あの、小中学生の時の話になるんですけど、

【渡邊】はい。

【質問者1】渡邊さん、その周りから関心とかを集めたくて、なんかちょっと不潔なこととかっていうのをやっていたっておっしゃってたんですけど、

【渡邊】はい。

【質問者1】僕もちょっとその関心とか、周りから集めたくて、僕の場合は、まあその、いい方向に評価されたいみたいなのがあって、渡邊さんとちょっと似てるけど、ちょっと価値観がちがうかなって思ったりしたんですけど。その渡邊さんの場合はその周り、勉強ができないから勉強して評価を上げたいとか、運動ができないから運動したりして評価を上げたいとかみたいな方向での関心の集め方っていう発想はなかったんですか。

【渡邊】そうですね。いい方向にはあんまり向かなかったのと、まあ虫食べたりすんのと、シンナー吸ったりすんのが社会的には全然違うじゃないですか。不潔なことと犯罪っていう。だけど、自分の中では多分、一貫はしてたんですよ。その一貫するなにかがあって、それが単純に評価されたいっていうよりも、自分は母親との関係の中で、やっぱなかなか自分の気持ちがいえなくて、そ

の感情そのものを否定したり認めないってなっていたんですけど。なんかこう、なんていうかな、そういう風を感じる感受性を持った自分として、ここに生きてられへんっていうか。確かに学校もあったし、人間関係もあったし、家族もいたんですけど、でもそれはさみしくないよとか、頑張るよって言えばそこにおれるんですけど、さみしくてどうしようもないっていうことになった時に、そこで受け入れてもらえない、どっかで自分がないっていうか。で、たまたまそれを見て見ぬふりっていうか、空っぽになって埋まらない何かをごまかしてとかするために、そういったことを自分はして、で、それがもうちょっと頭がよくなって、勉強ができれば、もしかしたらそっちにがんばって、条件をクリアしてっていう方向にいったんかもわからないんですけど。なんか自分は、でも悪い方向に向かって行ってたなっていうのが。

【質問者1】ありがとうございます。

【質問者2】アメリカとかで、薬物使用者に対して罰則ではなく、地域の依存症治療を優先するという制度があると思うんですけど、日本でもそれをした場合、渡邊さんがもし受けたとしたら、より早く立ち直れたと思いますか。

【渡邊】自分がですか。自分自身に関していうと、周りをめっちゃくちゃ整えてくれても、なかなか自分が整ってへん、みたいなこともあったり。逆に自分が整ってるのに、周りが整って…。なんかうまいこといえへんなあ。ごめんなさい。自分はなんかまあこの30代とか4代になって、ミーティングに行ってみみたいなこと。うーん。全く同じ支援とか治療でないにしても、自分は20歳で警察呼んで警察が依存症ちゃうかって病院に連れて行ってくれたんですけど、たしかに病気の症状が出だしたときに、例えば病気の症状知ってる人から見ると明らかに依存症の人、依存症の症状で困ってしまっていると思うんで。だけどそういう知識もないとただの犯罪者で、少年院に入れてしまえて終わってしまうので、そういう介入のできる人たちとか、そういう場所をちゃんと作ってるっていうことは、もしかしたらそのなかで選択肢も増えてたのかなとは思

んですけど。そうなってたら、そうなんかもわからないですけど、ちょっとそうになってないので。ごめんなさい。うまいこと話せなくて。

一個だけ思うのは、作ってはいきたいんですよ。例えば今、自分は今も変わらずアルコール依存症で薬物依存症なんですけど、同じようなりカバリーハウスいちごに来てる方とか、自助グループに通ってる方とかも、例えば、仕事とか人間関係の中で、全員が全員依存症って言ってない人もたくさんいて、自分が依存症の人間としていける場所どれくらいあるかなって考えたときに、例えば依存症をわかってる精神科病院とか区役所とかでやってる酒害教室とか相談を受けるようなところとか、自助グループとか、いくつかしかないんですよ。自分がアルコール依存症で、薬物依存症で、こういう経歴をもってるけれども、そこに行っていていいですかっていう、人とつながっている場所っていうのが極端に少ないのは少ないので。で、依存症の人、自分がお酒やめていくとか薬止めていくのに、なんか大海原をこう泳ぐときに、浮き輪がいっぱいあったらありがたじゃないですか。休憩するとこいっぱいあるんで。だけどそれが多分、今は何個かしかないんで、だからもっと自分は依存症ですって言っても、人と関わったり、いてもいい場所がどんどんどんどん社会の中にできていけば、そういうところに頼りながら、お酒・薬を使わない生活をやっていける人も増えてはいくのかなって。そういう理解とか場所がもっと多くなっていく必要はあるなとは思ってます。

【質問者3】 僕、警察官を目指してるんですけど、非行少年に対して、どうやって対処したらうまく改心させられるのかっていうのと、逆にどんなことをしてしまったら逆効果だよっていうのがあったら教えていただきたいです。

【渡邊】 そう、うーん。自分もちょっと信じれない人が何人かいるんですけど。なんか少年院で法務教官と出会って、ほんとにそこで生き方変わったっていう人何人か知ってるんですけど、自分はちょっとそれ理解できないんで。人の一言で変わるってことは自分は無理やったんで。だけどたまたまその法務教官が、少年院で出会った人の言葉で変わったっていう人が実際に何人もいるんで、ま

あそういう場合もあるのかなと思うんですけど、自分が、今も今日も、学生の方にずっと話を聞いていただいたんですけども、その時その時の薬物を使った結果、少年院に入ったとかってということだけを見たら、良いか悪いか、善か悪かって判断できるじゃないですか、それだけを見れば。だけどその人の過去とか、その人がどういう風に生きてきたかを聞いたり見たりする中で、なんかいいか悪いかだけで、判断がつかないっていうか、最近でもないんですけど、自分結構すごい大事に思ってたのが、加害者の被害者性みたいな。で、ずっと加害者として、例えば警察で捕まるようなことを中学校とかそれ以降ずっとやってきて、ずーっと加害者としては生きていますけど、どっかに、そうならざるを得なかったなんかがあったり。自分でいうと、自分がどこでどうおかしくなったかっていうのが、あんまりよく分かってなかった時期があって。で、あとトラウマって言葉も、震災とかおっきな被害とかみたいな、例えばすごい残酷なことが目の前で起こったのを目撃したとか、被害を受けたとかっていう人たちが、トラウマって使うのはいいけど、自分なんかトラウマって使ったら怒られるんちゃうかなみたいな。だから自分のなかが、どこで、どうボタンの掛け違いがあったか、分からなかったんですけど。だけど自分にとって、母親に対しての自分の気持ちが、言えなかったり、なんていうかそういうことをそういうふうに感じてもうた自分として、ここに生きてていいって思えなかったことが、自分をひた隠しにして、ないことにして、ないことにして生き抜かなあかんって思った結果、周りにとってはよくないことがどんどん起こってきたときに、自分自身を出しようがなかった。で、周りは鎧を脱げ鎧を脱げて言ってはくるけど、鎧脱いだら多分へなちょこな自分が飛び出す。でもへなちょこな自分を受け入れてくれひんやんっていう多分思いがあって、そうなっていったところがあったので、その、もしそのこれから警察官になられて、非行少年とかいろんな方と出会っていくなかで、全員が全員そうじゃないとは思いますが、だけどそうならざるを得なかったその人を、やったことが犯罪か犯罪じゃないかってこともすごく大事なことやと思うんですけど、でもそれを越えたところにある、それをなぜするようになってきたのかとか、その人にとってどういう意味があったんかっていうことを理解してくれる人がい

るっていうことも、すごく大きいのかなっていうふうに、思うので、はい。なんかそれは大事にしてほしいなと思いました。

【質問者3】ありがとうございます。

【質問者4】私は、養護教諭を目指しているんですけど、小学校の頃からお母さんのお金を盗んだとかっていうことがあったと思うんですけど、学校側からの介入で嫌だったこととか、こうしてもらえたらよかったかもとか思うこととかってございますか。

【渡邊】学校ですか。

【質問者4】そうです。

【渡邊】よかったほどじゃないかもわからんですけど、2人だけちょっと好きな先生がいて、1人は……なんかハーモニカが吹けたんですよ、自分ちょっとだけ。フランダーズの犬吹けて嬉しかった、ほめてくれて嬉しかった。もう1個は、絵描いたときに、絵、すごいグロテスクな絵を、人間描けって言われて人間描いたんですけど、それを気持ち悪い絵やなと思ってたんですけど。でもすごいで興味津々で先生が見てくれて、なんていうかな、感性みたいなことを見てくれてんのかなって。だから技術的なことっていうよりも、どう感じて、それをどう描きたかったみたいなことに関心を持ってきてるのかなって。すごくうれしかったのは、嬉しいのはそんな感じで。

あとは、小学、中学くらいからになるんですけど、ほとんど勉強ができないんですよ。テストとかみんなするじゃないですか。で、テストが配られても、先生がぐーって、ぱーってやってきて「渡邊君、どうせできひんやろ。漫画でも描いてきや。」って裏向けて描いてきっていわれて。当時はラッキーで思って、なんか得したと思って。テスト嫌だったんで、でも今考えると、なんか最初からもうあきらめてしまってるので、もったいなかったな、もったいないってい

うのは、先生もなんか苦手やろけど、なんかちょっとやってみるかかって言ってくれたら、もしかしたらやってみよかなって思ったのかなとか。

であとは宿題とか、ほとんどやったことがない、出したことがないので。今はもうないかもわからないですけど、当時は居残りするとか掃除当番とかセットに大体なっていたんですよ、ちょっと悪さしたりしたら。そんときに、今でいうと悪いことしたと思ってはないことはないですよ。宿題せんこと怒られてごめんなさいって思ってるんですけど。ただ、なんていうかな、なんか分離を失ってしまったんですよ、なかで。悪いことした、悪いっていか宿題せんかったことは申し訳なかった。だけど帰りたいから帰りますみたいな。だけどその周りの友達、帰るってのは反省してないから帰れるってとるじゃないすか。行動でその人の気持ちとか考えることを判断されるので、自分は、かといって悪気がないわけじゃないけども、帰りたいから帰るで帰ってしまうので、そこでまわりが理解してる渡邊っていう人間に対しての理解と、そういう不真面目なお前は不真面目なやつだって言われて、自分もそういうやつだって思うようにはなったんで。なにかをしな場合とか、なにか他の人が、他の生徒がやっても、やってないことがあっての、なんかその人に自分はあんなのかなとか、その思考が分離するといふかなんか変な言い方なんですけど、なんかこう、悪いことしたことは申し訳ない、だけど帰りたいっていうところでこう、やってしまうところがあったんで、なんかそういうのはあったのかな。

であともう1個だけ、自分、通信高校を卒業したってさっき話したんですけど。そんなかで、ニューヨークの国連に遊びに行ったんですよ。3人ぐらい知り合いが会見したりしたって聞いてたんで、興味あんなあって、ただ行っただけなんですけど。ホロコーストとかあるじゃないですか。そういうことも見たくていろいろ行ったんですけど、今までは国連でやってることはようわからへんかったのもあったし、ホロコーストとか聞いても、どっかの、遙か異国で起こった、なんかわけわからん事やっとなんか思ってたんですけど、だけど実際に、アメリカのミーティングにたくさん行ったりとか、仲間と出会うじゃないすか。そうすると、だいたい泊まらせてもらってきたブルックリンとかブロンクスとか、その辺の仲間の家に大体ニューヨーク行ったら泊まるんですけど、そうす

ると、大阪とかでいうと、日本でいうとコリアタウンとか、コミュニティがあるじゃないですか。同じようにユダヤの人たちのコミュニティが普通にあって。そんなかで、同じ依存症でミーティングに行ってる人の祖父母の一家が焼き殺されてるみたいな話を聞いたりして、なんか今までは遥か異国で起こってる、全く自分とは縁のない話だったんですけど、ちょっとこうだからといって直接同じではないんですけど、でもなんかまわりまわって、すごい関連してるのかなみたいなことを思った時に、関心が出て、そこを見に行ったりしたんですけど。でもそれが、その通信高校の教科書に載ってるじゃないですか。載ってたんですよ国連のこととかも。で、そのときに、自分が、実際にそこまで行ってみたり聞いたり読んだりしたことって、教科書に載ってるんですよ。でも、自分は教科書から自分の関心につながらなかったんで、そこに行ってみたりとか、知ってみたいと思わなかったんですけど。でもいろんな人との出会いとか体験の中から自分の関心につながったときに、実際に行動を起こして、そこに行ったら何かを学ぶとか、何かの知識を得たいっていうのが自分だったので、関心にどう触れられるかっていうのが自分にとってはおっきかったのかなっていうのがある。だから、勉強とか学ぶとか自体が嫌いじゃなくて、自分とどう関係しているのか分からんことをやらされるのは多分嫌なんで、何がどう自分と関係してるかっていうことを一緒にやっていけたら、勝手にやりだすかなって。だからそういうのを芽生えさせていけるような関わりをしてくれる人がいたらすごくよかったのかなって。

【質問者4】ありがとうございます。

【司会】今日は、渡邊先生から貴重なお話をお伺いすることができました。ありがとうございました。

【会場】（一同拍手）

【渡邊】どうもありがとうございました。